

二人の甘い夜は終わらない

目次

二人の甘い夜は終わらない

5

番外編 爽さわやか貴公子の執着愛は止まらない

253

二人の甘い夜は終わらない

1 誕生日とはいえ、こんなことになるなんて

テンポの良いローヒールの音が、エレベーターの前で止まった。

横に並んだパンツスーツ姿の女性に気づいた男性が、すっと目線を向ける。そして相手に、緊張気味なのか、やや強張った声で朝の挨拶をした。

「おはようございます。成瀬補佐」

「おはよう、山崎」

成瀬花乃は、いつも通りの短い挨拶を済ませると、男にニコリと笑いかけた。開いた扉からエレベーターに乗り込み、今日の予定を頭に思い浮かべる。

その凛とした姿は、情報システム部のあるフロアにエレベーターが停まっても変わらない。扉が開くと、自分より遅れ気味に歩く部下の前を颯爽と歩き出した。大きめのモニターが載ったデスクに向かい、通路をコツコツと進む。

そんな花乃に、先に来ていた部下がスマホから目を離さず挨拶をしてきた。

「おはようございます」

「おはよう、水野。昨日のアップデートは問題なかった？」

「あく、今からチェックするところ……です」

花乃の質問でようやく手に持った端末から目を離した水野を横目に、ノートパソコンを社内ネットワークに繋げる。

花乃の勤務先である花鳥CRMシステムは、ケミカル・化粧品大手、花鳥グループの子会社である。この会社では、花鳥グループすべてのシステム管理を担っている。

花乃が属する情報システム部は、会社の中でもっとも忙しい部署だ。毎日システム更新に追われ、一日の始まりがとても早い。

壁時計を見ると、現在の時刻は午前七時ちよつと前。

朝番シフトは皆七時出勤なので、周りではすでに半数の社員が出勤していた。席についた花乃は早速、仕事に取り掛かる。

まずは、先ほど倉田主任からスマホに届いた仕事のメールを確認しよう。

カーソルを動かした花乃が『新規ID作成依頼』という件名のメールを開こうとした瞬間、部下の悲愴な悲鳴が上がった。

「あく！ このアプリ、またコケてるっ！ この更新って一体どうなってるんだよおっ」

まったく、出社したばかりだというのに、朝っぱらからもう問題発生だ。

机の向こうで悲鳴を上げた後も「なんで途中でリンク切れて……」とぶつぶつ言い始めた部下を見て、今日も忙しい一日になりそうだと小さなため息を一つつく。

「なんです？ 成瀬王子は……朝からいやに意味深なため息ついてますね〜」

あくび混じりの間延びた声が、隣の席から聞こえる。

「意味深じゃなくて、諦めのため息よ。——主任ってば、また私にID作成投げて逃げたのよ。それに私の肩書きは、一応主任補佐だからね。なんで王子なのよ」

ようやく出社してきた部下——高田の軽口に言い返しつつも、花乃はいまだ姿を現さない上司の席をチラリと見やる。いつもひょうひょうとしていて捉えどころのない主任は、またまた遅刻らしい。

「おー、そうでした！ ついつい……」

そう言いながらも、高田の表情は全然すまなそうでない。

どうしてこの部署には、仕事はできるが扱いにくい人ばかりが集まっているのだろう。だがこれも仕事のうちと、花乃は諦め混じりに悲鳴の主もとへと駆けつけた。

「高田は、バックアップのチェック始めて。ほら水野も、突っ伏してないで、さっさとデータ回復！」

ところが、慣れた様子で花乃が作業を促した途端に、个性的すぎる発言の数々が返ってくる。

「さてと、ちよつとコーヒー淹れてきますか」

「あいつ、また遅番サボったな。俺だつてミキちゃんのフィギュアの仕上がり我慢して、居残ったのにい」

（こらあ、なんでそんなマイペースなのよ！）

上司から仕事を振られてすぐに席を立つ。はたまたアニメのキャラ名を叫びながら、さらに机に

突っ伏す。そんな彼らの姿には慣れきっているものの、時々、根性を入れ直せ！ と活を入れたくなる。

そんな衝動を抑えつつ、花乃は心を一旦落ち着かせようと、ガラス越しに隣接するお客様コールセンターを眺めた。

そして、よしと気合を入れ直す。

「まだセンター開始まで二時間あるわ。回復させるわよ」

コンピューターがずらりと並んだコールセンターの静まり返った様子に、焦っちゃダメ、と自分を叱咤する。

そしてようやくノロノロと動き始めた部下たちを見て、自分の席に帰った。

ふうと一息つくと、先ほどの倉田主任からのメールを開く。

途端、視界に飛び込んできた名前に、心臓がドクンと飛び跳ねた。

その二文字を穴があくほど見つめた後、ようやくまぶたがパチパチッと動く。

近々就任する新社長の下の名前が、なんと初恋の人と同じだったのだ。

今でも忘れられないその名を見た瞬間、花乃はしばらく固まった。

続いて、動悸がトクトクと速まってくる。さり気なく胸を押さえ、深く息を吸い込んだ。

（落ち着いて——。一樹なんて、珍しくもない名前なんだし）

名字が違うのだし、明らかに別人だ。だからなにもここまで動揺する理由はない……そう自分に言い聞かせる。けれど、一旦高まってしまった花乃の心音は、思うように収まってくれない。

グラグラ揺れ動く心からは「ただ今仕事中」の意識が、ぽろりと抜け落ち——思わずポツリと呟いた。

「……四歳差なんて、この歳になればないも同然よね……」

ここしばらくは、仕事に追われて振り返ることもなかった、花乃の大切な宝物のような思い出が心に浮かんでくる。

(私、やっぱりまだ……)

懐かしさ、愛おしさ、甘酸っぱさプラス、ずきんとくる心の痛み。

ふと、遠い昔に垣間見た光景と、初恋の人が漏らした本音が脳裏に蘇る。

友達に囲まれた彼は、冗談であつても花乃をそんな目で見られるわけがないと、顔をしかめていた。あまりにも年下で、なおかつタイプでもない——そう言い切られたあの誕生日の日……

キツい、いまだにキツい。

多感な年頃のファーストラブだったとはいえ、十五年も前のことでズーンと落ち込んでしまいそうになる。

——いやいや、この広い世の中、彼だけが男じゃない。

これまでも、デートに誘ってくれた人はいた。

だが、いざ彼らを思い出そうとすると、初恋の人以外の名前が出てこないなんて。

こんなだから、数回のデートですぐダメになるのだろう。

そんな自分に付き合つて、もはや二十七年——いや、今日で花乃は二十八歳になる。

花乃の口から思わず、「はあ」と重いため息が漏れた。

けれど今は、そんなおセンチな感傷に浸っている場合ではない。ここは気の抜けない仕事場である。

花乃は、追想を十五秒キツカリで頭の隅へと追いやった。

よし、上司から依頼されたID作成を、サッサと片してしまおう。

心中で小さなため息をついた後、頭を切り替え、キーボードを叩き始める。

(えーと、ログイン名とパスワードと……、権限は——)

そういえば、懐かしい人と同じ名を持つ社長とは、どんな人なのだろう。

作業を終えて依頼のメールを処理済みフォルダーへさっさと放り込みつつ、花乃は部下に聞いてみた。

「ねえ、今度うちに来る新社長ってどんな人なの？ 何か知ってる？」

「新社長ですか？」

すると高田は、スクリーンから一瞬間を上げてこちらを見た。

「あゝ、噂の本店エリートですね」

水野も噂は聞いたことがあると、アプリを操作しながら答える。この会社の親会社である花鳥コーポレーションは、社員の間では本店と呼ばれている。

部下は二人ともマイペースなくせに、本店とのやり取りも多いせいか、意外にも新社長のプロフィールに詳しくかった。

(……アメリカの会社からの引き抜き、かあ。へえ……)
業務連絡以外は滅多に雑談をしない花乃が興味を示したため、二人とも面白がって次々情報を上げてくる。

それによると、新社長はイギリスの大学研究室で企業との合同研究が成功して、そのままあちらで就職をした若きエリートらしい。本店にヘッドハントされてからは、経営マネージメントに関わっているそうだ。今回の就任に至るまでの輝かしい功績を、花乃は仕事をしながらふうんと半分聞き流す。

こうして、花乃の一日はいつも通り仕事に追われる形で始まり、ドタバタと過ぎていったのだった。

その日の夕方。

技術は超一流だが、その分超マイペースのエンジニアたちを、脅かしつつ宥めつつ、何とか無事に業務を終えた。早番であった花乃の終業時間とはつくに過ぎていて、気がつけばもう夜の六時近くだ。

さすがの花乃もちよつとバテ気味かも……と、ため息をついた。

だが今日は、花乃がメグと呼ぶ、友人のめぐみと飲む約束がある。

気の置けない友人との楽しいお喋りは、疲れた心の気晴らしにちょうどいい。

それに今夜は花乃の誕生日だからと、奮発して会社近くの高級ホテルのバーで飲むことになっ

ている。いささか弾んだ調子で主任への報告を済ませた花乃は、会社を出る前に化粧室のドアを押した。

(うわあ、ラッシュアワーに引つかかっちゃったわ、これ……)

身だしなみを整えようと、少しだけ寄るつもりが、コールセンターの女性たちの終業時間と重なったようだ。

鏡の前はヘアブラシを手に持つ人や、化粧直しをする女性で満員御礼状態だった。

「あ！ 成瀬王子、お疲れ様です。今日はどこかへお出かけですか？」

「成瀬さんも、ご一緒しませんか？ ちょうど駅前の新しいお店の話をして」

早速、花乃にも週末前の華やかなお誘いがかかる。

「ありがとう。でも、今日は誕生日で約束があるのよ」

「えっ、そうだったんですか！ なんだあ、言ってくれば何か用意したのにい」

「そうですよ、一言おっしゃってくれば……日頃お世話になってるんだし」

女性たちの驚いた表情には、内心で苦笑いだ。

彼女たちのパソコントラブルは花乃の業務外ではあるが、ヘルプデスク——パソコントラブルのサポート部が手いっぱいの際は面倒を見ている。女性ばかりのチームなので、扱いには気をつけなければ。

花乃は女子校育ちではあったが、記念日をみんなで祝う習慣がない。特に、誕生日に関してはあまりいい思い出が……いや違う、全然まったく良い思い出がないため、今日だってもしめぐみに誘

われていなかったら、さつさと家に帰っていた。

「この歳になったらもう、祝う気も起こらないのよ。でもありがとう。気持ちはありがたく受け取っておくわ」

当たり前障りのない言葉と、いつものように気持ちを隠す笑顔で、花乃は氣遣いに対する礼を述べた。

「もう、成瀬さんつてば、相変わらずクールですね」

「あ、だったら。あのっ、ぜひ髪セットさせてください！」

「私、新色持つてる！ きゃあメイクさせて〜」

(え？ あ、あの……)

内心焦りながらどう対応するかを考えているうちに、あつという間に鏡の前に引つ張られていた。こうなったらもう、彼女たちに好きにイジらせるしかない……

どこからか現れた椅子に座らされ、「ありがとう」とニコニコ笑いながら、花乃は潔く抗うのを諦めた。

「ちよつと、誰か、ピン持つてない？」

「こんな感じで、ここはこうよ」

女性たちがああでもない、こうでもないと言いながら、花乃の髪や顔をセットしていく。

花乃がこうやって弄られるのは初めてではない。

女子校出身の定めなのか、演劇部のヒーロー役や文化祭のウェイターなど、やたら飾り付けられ

る機会が多々あった。女性にしては背が高いこともあり、柵の上の物を取ってあげたりと何かと頼りにされ、学生の頃から王子と呼ばれている。

そして、こうして女性たちに囲まれていると、なぜだが疎外感を覚えてしまうのもいつものこと。何というか、可愛い丸がたくさん集まっている中に、一つだけ三角の自分がポツンと混じっている……そんな感じだ。

だけど一人は慣れつこだし、今さらそんなことを気にしてもしょうがない。

気がついた時には、お人形のように髪を櫛でとかれていた。そして彼女たちの気が済むまで弄られた後、鏡に映った自分を見してみる。

するとそこには、いつもとちよつと違う、華やかな感じの大人の女性が映っていた。

目元メイクは淡いグリーン系で、こんな色使いは今まで試したことはなかったが、いつもよりグツと女らしい感じがする。

少しくせのあるショートボブは、前髪の分け目からふんわりと流してある。

さらりと流れてくる髪を耳の後ろにかきあげながら、「うん、とつても気に入ったわ」と周りの女性たちにニコリ笑いかけた。

「ほんとにありがとうね、メイクも髪型も」

再度お礼を言つて、目的地に向かいコッコツと歩き出した。

いつものように一人で夕食を済ませた花乃は、待ち合わせの高級ホテルのバーに来ていた。

初めて訪れたバーは、今風のライトアップと昔ながらの木造りカウンターとがうまくマッチした、とてもお洒落な店だ。めぐみ gaze びにと勧めたのも納得で、上品で落ち着いた雰囲気の花乃の心は安らいだ。

「カクテルをお願いします、今日は誕生日なんです」
バーテンダーの注文取りにも、上機嫌で答える。

「じゃあ、とっておきのを作りますね」と、しばらくして差し出されたのは、見たこともない華麗な色のカクテルだった。

淡いピンクから順々に薄い紫、鮮やかな青へと色に変化しているのを見て、花乃は驚いた。

これはもう芸術品だ。そう思わせるくらい鮮やかな色彩……

しばらくその美しい色の取り合わせに、うっとり見惚れる。

「うわぁ、綺麗、なんだか飲むのがもったいない」

「そんなこと言わずに、試してみてください」

「じゃあ、いただきます」

（ああ、味もすごい美味しい）

喉ごしが良くて、何杯でもいけそうだ。

「見た目より、アルコールがきついですから、ゆっくり味わってくださいね。結構後できますよ」

「そうなんです、気をつけます。それにしても、とても美味しいです。なんとこのカクテルなんですか？」

「そうですね、『甘い思い出』なんてどうですか？」

カクテルを作ってくれたバーテンダーは笑って、次の客のカクテルを作り出した。

（甘い思い出、かあ……）

今日は朝から、やけに昔のことを思い出す出来事が多いのはなぜ……？

そんなことをぼんやり考えながら、落ち着いた雰囲気のあるバーでグラスを傾けた。

金曜の夜だからか、しばらくすると店内は人が増えてきた。カウンター席も徐々に埋まり始める。

（あ、そうだわ、メグの分も注文しておいてあげよう。席を取ってるって分かりやすくもなるし）

隣には一応バッグを置いているが、どっちみちもうすぐ約束の時間だ。席がどんどんなくなるのを見て、花乃はもう一度バーテンダーに声をかけた。

「すみません、同じカクテルを連れの分もいいですか？」

「はい、少々お待ちください」

そうやって、もうすぐ来るはずの友人を待っていると、不意に後ろから声がかかった。

「隣、空いていますか？」

（やっばり、来ちゃったか）

カウンター席はもうすでにほぼ満席で、残りは花乃の隣とカプルの横しか空いていない。

めぐみの席は確保しなければ、と断るために後ろを振り向いた。

「すみませんが、もうすぐ連れが来るので……」

（……えっ？ ええっ!? うそ……かずき、さん……?）

振り向いた先にいたのは、背の高い男性だった。

柔らかな茶色の髪に、鼻筋の通った端正な顔立ち。意志の強そうな口元に力強い瞳。気品のある貴公子のような面差しは、忘れたくても忘れられない初恋の人の顔だ。

衝撃のあまり、花乃の身体が一瞬にして固まった。

それほど、目の前の男性は初恋の人——遠藤一樹をそのまま大人にしたような華麗な容姿だったのだ。

そのこげ茶の瞳に囚われたように、彼から目が離せない。

彼は硬直している花乃を見て、ちよっと驚いたように目を見張った。

「ああ、天宮さん、いつものでいいですか」

だがすぐに、バーテンダーにかけられた声に、上品に微笑んだ。

「よろしく頼む」

(あ……)

人違いだ。彼とは別人だった。

だけど花乃は、長年忘れられない顔の男性から目を逸らすことができない。

バーテンダーに目を向けていた彼が、花乃の視線に気がついたのだろう、またこちらを見つめてきた。

二人の視線が交差する。

「天宮さん。こちらにいらっしやっただけですか、探しましたよ」

後ろから聞こえた華やかな声の方を振り向くと、綺麗な女性がこちらに向かって歩いてくる。

「ああ、すまない、一杯やりたくなくて」

その瞬間、感じた落胆に、自分でも驚いた。

(一瞬目が合っただけに、なんでこんなガツカリしてるの……)

「はい、ご注文のカクテルどうぞ。天宮さんも、できましたよ」

「あ、ありがとう……」

気を取り直してグラスを受け取ったものの、隣の席にカクテルを置く手がかすかに震えた。

彼はニッコリ笑って「ありがとう」と水割りを受け取ると、連れらしき女性とカウンターを離れていく。目の端で追ったその後ろ姿が消えても、花乃の手はまだ震えている。

(どうしちゃったのよ？ 私ったら……)

けれども、心の底ではこのショックの原因がはっきりと分かっていた。

初恋の人である遠藤一樹に、あそこまで酷似な人に初めて出会った。だが、花乃の好みのドストライクである先ほどの男性には、すでにお似合いの連れがいたのだ。

そのことに、大げさなほどガツカリしている。

一瞬で恋に落ち、次の瞬間失恋したような、そんなしよげた気分になったところに、手元のスマホが光った。

見ると、めぐみからのメッセージだ。

『ごめん！ 旦那からデートに誘われた。悪い、今度奢る。誕生日おめでと〜、カンパ〜』

(なっ！ なんですってーっ、メグのやつー！)

親友とその夫は結婚前からラブラブだったが、結婚後も相変わらずだ。

三年経っても変わらないそのイチヤイチャぶりに、思わず諦めの深いため息が出る。

女の友情は血よりも濃く、恋より脆い。

それが通説とはいえ、この期に及んでのドタキャンなんて……

傷心気分の今の自分に、今回のキャンセルはちよつとキツイ。

「はあ、まったく」

カクテルグラスを勢いよく手に取り、ヤケになって二杯とも続けてゴクゴクと一気飲みした。

だが飲み干した途端に、目眩のようなクラつとした酩酊感に襲われる。

(あ……これはまずった、かも……)

カクテルは甘く軽やかな味わいだが、アルコール度数が高いので、ゆっくり飲むよう注意されたことをすっかり失念していた。

しまった。油断した、と思つた時には、すでにクラクラしていた。これはよくない……酔い潰れる前の感覚に、とても似ている。

ボンヤリしてくる頭の中でまだなんとか働いている理性が、家に帰れと危険信号を送ってくる。

(そうね、早くここを出て、帰らなきゃ……)

だんだん熱くなってくる身体をゆっくり動かし、にこやかに笑いながらバーテンダーに礼を言つて店を出た。

エレベーターを呼び出すボタンを人差し指で押すと、ふうと壁にもたれ掛かる。

(やっぱり……メグに一言、言つてやらなきゃ、気が済まないわ……)

「この裏切り者！」

「えっ？」

スマホを片手に送つた内容を、知らず知らず声に出していたらしい。メッセージを送つた途端、横から戸惑つた声が聞こえた。

「あつ……ごめん、なさ……いい」

見ると、先ほどのイケメン様が、いつの間にか側に立っていた。

花乃が、エレベーターのボタンを押す邪魔になつていたようだ。咄嗟にもたれ掛かつていた壁から、身体をゆっくり起こす。彼の妨げにならないようにと、横に移動した。

途端にまた、クラツと目眩がしてくる。

「大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫、です……すみません、ボタン……邪魔でしたね」

心配そうに声をかけてくれる男性に、申し訳ない、と懸命に謝る。

すると、いつの間にか彼の逞しい身体に寄りかかっていた。その事実にとても焦りつつも、別のことに驚いていた。

花乃は女性にしては身長が高い。人から聞かれたら百六十五センチくらいかなと答えているが、正確には百六十九・七センチだ。この公式記録は中学三年の時のもので、日本人男性の平均身長と

ほぼ同じ百七十には絶対四捨五入しないところがミソである。

そしてヒール付きのパンプスを履いている今、軽く百七十センチを超えた状態なのに……この男性は、そんな花乃を軽々と超える高身長だった。力が入らない腰を、長い腕でしっかりと抱えてくれている。

「……少し座って、水でも飲まれた方が……」

耳に心地よい声が頭上から聞こえる。

普段味わえない経験にジーンと感動していると、エレベーターの到着音がポーンと鳴った。

「ありがとうございます……大丈夫ですから」

無理やり身体に力を入れて歩き出そうとしたのだが、足がもつれてよろめきかけた。

「おっと……やはり休まれた方がいいですよ」

「いえ、いいん……です……」

彼に、「何階ですか？」と聞かれた。

定まらない視線の先には、ずらっとボタンが並んでいる。ロビーの文字を探し彷徨っていた手を止めて、彼に答えようとした瞬間に、エレベーターがフワンと動いた。

その浮遊感に、あ、と思った一瞬後には意識が遠のいていた。

「しつかりなさってください。危ないですよ」

話しかけてくれる深い声が耳に馴染む。逞しい腕と清潔な匂いのするスーツは、最高に抱かれ心地が良い。

なぜだか一気に安心感が襲ってきて、男性に抱きついたのが、はつきりとした記憶の最後だった。「参ったな……」

ポーツとした頭の上で、深いため息が聞こえた気がした。

窮屈だわ、とパンプスを脱いだら、足の下が柔らかい。風船の上を歩いているようなフカフカの絨毯だ。

弾む感触がすこぶる気持ちよくて、花乃は逞しい腕に導かれるままソファに座り込んだ。

どれくらいそうしていたのか……気がつくど、もたれ掛かったソファから優しい手が抱き起こしてくれている。

「ほら、水だ」

「ん……」

「ああ、こぼすなよ」

言われたそばから、手にしたグラスがスルリとすり抜けた。——が、分厚い絨毯のおかげで、割れもせずトサツと柔らかい音を立て転がっていく。

「大丈夫か？」

「あれ、ごめ、んあさあい……」

「気にするな、それより……ケガはないな。だがこのままでは風邪をひく。ちょっと待ってなやろ」

焦点の定まらない目でひんやりとする胸元を見てみれば、ブラウスがびしょ濡れだ。

(タ、タオル……)

何か拭うものを取りに行こうとするが、足に力が入らず、身体がソファからズリ落ちていく。花乃はしようがないとそのまま四つん這いになり、彼の消えた方へと絨毯の上をスルスルと這っていった。

だけど、重い身体を引きずり追いかけても、なかなか彼にたどり着けない。

この部屋つて結構広いなあと思いつつ、途中でペシャンと潰れた。

「えっ？ あつ、何をして……」

タオルを片手に現れた彼が、驚いた顔をしている。

「ふにゃ、あゝタオル、あんとおゝ」

「待て、ここで脱ぐな」

身体が、ふわっと持ち上がった。

「割と軽いな」

何が起こったのかが、分からなかった。

花乃は生まれてこのかた、お姫様だつこなぞされたことがなかったのだ。

ポカンとしていると、いつの間にかそこは広いバスルームの中で、ふつくらとしたタオルの上に乗ったと座り込んでいた。

(んゝ、そう……よね、シャワー……)

目の前の透明なドアを見た途端、そうだシャワーを浴びないと、となぜか使命感に燃えて服を脱ぎだした。

「ん、もうちょい……」

やっと温かいお湯が出てきた。だが酔った身体は思うように動いてくれない。ふらふらと壁にもたれ掛かり、そのまま大理石をズルズルと滑り降りていくと動けなくなった。

(……まあ、洗えるし、いつか……)

座ったまま温かなお湯にうたれていると、キュッと音がしてシャワーが止まる。次の瞬間にはタオルで包まれ、長い腕に抱えられていた。

「まったく、湯冷めするぞ」

幼な子のように優しく拭かれて、バスローブを着せられ、身体がまたふわりと浮いた。気がつけばシートの上に寝かされていた。

(ふわあ、おやすみ、なさい……)

手のひらに感じるコットンの柔らかさと、背中に感じるベッドの感触に、寝心地最高くと重いまぶたが自然と閉じる。遠ざかる意識の外で、ララバイのような低い声が聞こえる。

「寝てしまったのか……仕方ないな」

枕元のテーブルでスマホが、コトンと音を立てた。

「……帰国した途端、スゴイ拾い物だ。さて……」

「おやすみ」と髪を優しく撫でられると、静かな衣擦れの音が遠ざかっていく。

しばらくして耳慣れたパソコンの起動音が聞こえると、一緒にいてくれるんだ……と、胸に温かな安心感が広がった。

そして突然襲ってきた眠気に誘われるまま、花乃はスーと寝息を立てたのだった。

やけに静かだ。いつもと何かが違う。

予感めいた胸騒ぎに、目をゆっくり開いた。

何だかふわふわした気分で、とても心地がいい。

(……真っ暗? ——でも、綺麗……)

横を向くと枕元から見えるロマンチックな街明かりに、ふわんとした夢心地のまま見惚れる。

そのままベッドでウトウトしていたのだが、やがて喉が渴いてきた。

「よいしょっと、水は……」

ゆっくり起き上がると、視界に入るのを見たことのない部屋。いや、見覚えがあるような、ないような……

全身で感じる浮遊感に、花乃は自分が夢を見ているのだと思った。

(確か……こっちのテーブルの上に、お水のボトルが……)

頭に残るかすかな記憶を頼りに、危なげな足運びで移動する。ベッドルームから見えた居間のよな部屋まで来ると、ソファー前のローテーブルにお目当てのボトルがあった。

求めていた水を手にして、ボトルから一口、二口、コクンと喉を潤す。

(ふわぁ、おいしい)

ほんの少しだが、平衡感覚が戻ってきた。

だけど頭はちゃんと働かず、足元もまだおぼつかない。部屋をポーツと見渡した目が、見慣れないものを捉えたような気がして、一度素通りしたソファーに視線を引き戻す。

なんと、そこには長年想い続けた一樹本人が寝ている。

(うわぁ……なんてラッキーな夢。ああもう、寝顔も、スツゴクいい……)

色褪せない記憶の姿を、そのまま大人にしたスマートな容貌に、思わず見惚れた。

花乃は屈み込んで、その額にかかる柔らかな前髪を愛おしそうにかきあげた。

(やっぱり……すごい好き。なんて幸せ……)

初恋の人は、彼が高校生だった頃も言葉にできないくらい大好きだった。ましてやこんなに成長した大人の姿を見ていると、心の奥が一層深く震えてくる。

柔らかい髪を指先で梳きながら幸せ気分浸っていると、目の前にある長い睫毛がゆっくり持ち上げられた。

綺麗な瞳が真っ直ぐこちらを向く。

「どうした?」

(うわぁ、声まで深みがある……なんかくる——)

記憶に残る声よりいくぶん低めで深みが増した掠れ声が静かな部屋に響くと、胸をズキンと射抜かれた。

「……こんなところで寝てたら、カゼをひいちゃうわ……」

「ああ、気にしないでいい」

「……ダメよ、ベッドに……」

気のおけない懐かしい感覚が嬉しくて、心からの笑顔になる。

そう、夢だからこそ、わだかまりなく二人は普通に会話している。……そう思いつつ、我慢できず指先でその頬に触れてみた。

彼の温もりが肌を通し、心にまで伝わってきて、急にキスをしたくて堪らなくなる。

夢ならば、きつと……

花乃は、「だが……」と言いかけた愛しい唇に、ゆっくり近づいてそつとキスをした。

「ん……」

一樹と交わす初めてのキス。なのに、ためらいはない。

柔らかい唇は離れがたくて、戯れるように甘噛みをする、なんとも言えないしつとり感に心が舞い上がる。

花乃から突然仕掛けられたキスに、彼は驚いたように目を見張った。

その呆気に取りられた顔が面白くて、悪戯つぽく彼の唇をべろりと舌尖で舐め上げる。

すると、その見開いた瞳が優しく和んだ後、長い腕に引き寄せられた。

「……分かった」

鼓動が跳ね上がると同時に、唇がそつと重なってくる。

彼からキスをしてくれた！

心が嬉しきでいっぱいになる。沸騰する前のお湯のように、ふつふつと小さな気泡が身体中から湧き上がってくる。

(ああほんと、なんていい夢なの……)

温かい唇にウツトリ目を閉じた。

こんな風に一樹とキスを交わすのを、ずつと……夢見ていた。

もつと触れたい。それにもつと触れてほしい。

じつとしていられなくて、身を起こす彼の首に腕を回すと、髪を弄り深いキスへと誘い込む。すると彼は顔の角度を変えながら、花乃の要求に進んで応えてくれる。

もつと近くに……と擦り寄っているうちに、身体はいつの間にか彼に組み敷かれていた。

「う……ん……」

全身で感じる彼の重み。それが嬉しくて、堪らない。

体温が触れ合う幸せな感触に甘く酔いしれ、気持ちいい……と、何度もキスを交わした。

やがて二人は同時に唇をチュッと離し、しばらく見つめ合う。

(すごいこの夢、なんといい夢がある……)

肌を感じる温かい体温。熱い息遣いや、ドキドキする心臓の音まで……なんて素晴らしいのだろう。

現実ではありえないと、花乃は有頂天になる。

想いを込めつつ見つめ返しても、最後の記憶のようにあからさまに目を逸らされたりはしない。それどころか、目の前の彼は愛おしそうに微笑み返してくれる。

まるであの頃、二人だけで過ごした時間が戻ったみたいだ。

忘れもしない、この嬉しそうな表情——夢のまた夢だと分かっている、愛おしさが溢れて止まらない。

自分から会うことは決してない。そう思っていただけに、嬉しさで切なさで泣きそうになる。すると彼は、おもむろに身体を離し立ち上がった。

(つ——！ やっぱり……夢でも去っていく、のね……)

突然消えたその温もりに、胸が痛くなる。仕方ないと諦めるしかない……

だけど、立ち去ると思われた彼は屈み込んできて、その長い腕で花乃の身体を抱き上げた。そのまま、大きなベッドに運ばれる。

どうやら彼はまだ一緒にいてくれるらしい。

力強く歩みながら悪戯っぽい瞳で笑いかけられると、うわあと全身が歓喜した。思わず昔のように「一樹さん」と愛しい名を呼んでしまいそうになる。

この至福の夢の中では、彼がなぜか自分を女性扱いしてくれている。

そしてこのまま夢を見続ければ、キス以上のコトまでしてくれるかもしれないと、淡い期待で胸が膨らむ。

たとえ幻でも、極上に甘い夢の中で、一度でいいから愛されてみたかった。

(だけど呼びかけたら、目が覚めてしまうのかも……)

ぼんやりした思考でそう結論付けた花乃は、喉まで出かかった声を呑み込む。

代わりに、やんわりベッドに下ろされると、彼の瞳を見つめて笑いかけた。どうしても彼に触れてほしくて、おずおずとすではだけていたバスローブの紐を解いていく。

「……なんて、可憐な花に——」

静寂な闇に秘めやかに響く甘い囁き。そのどうしようもなくセクシーな声に、身体中がゾクリと騒めいた。

(ああ、このまま……)

覚めないで、とわなないた途端に、目を細めた彼がローブを脱いで覆い被さってきた。

その引き締まった身体に赤面しながらも、待っていたとばかりに両手を伸ばす。すると彼は手を取って優しく握り締め、手のひらに顔を寄せるとチュッとキスを落とす。

丁寧なその仕草の中にも、彼の秘めた情熱が伝わる。

ドキンドキンと高鳴る胸は大きな手に包まれ、漏れそうになる声を誤魔化すように瞬きをした。だけど膨らみを優しく捏ねるように揉まれると、思わず「んん……」と艶っぽい吐息が漏れる。

彼は顔を花乃の胸に近づけると、ツンと尖ってきた蕾をそっと摘んだ。たちどころにジンときて、身体が大きく震える。

「……敏感だな」

胸元で響く、低く抑えた声。指の腹でキュッと先端を強く擦られると、ジリジリとくすぶる心の

中まで、どろりと溶けた熱が浸透してくる。

堪らず「あ、ん……」と身体を震わすと、たちまち唇が重なった。わずかに開いた隙間から彼の舌がスルリと侵入してくる。いきなりすることに驚いたのはほんの一瞬で、すぐ夢中で舌を絡ませた。

「——お願い、たくさん触って……」

心からそう思える人とのキスは、煽るのも煽られるのも堪らなく気持ちがいい。

……もつと深くに、もつと奥まで入ってきてほしい。

口内を探り、舌を絡ませている、食欲に貪つてくる彼が愛おしくてしかたない。

大きな手で胸や脇腹、背中まで優しくなぞられると、触られてもいない足の間が熱っぽくジンジンと疼き出した。

抗いがたい衝動に突き動かされ、腕を回し柔らかい髪に指を絡める。

（ああやつぱり、大好き……）

深いキスを繰り返すあいだに、彼の長い睫毛が軽やかに肌を撫でてくる。

そのかすかに触れる感覚がくすぐったい。

心はグズグズに溶け、身体はビクンと震えっぱなしで、口端から甘い唾液が溢れ出す。

すると彼は流れ出た唾液を美味しそうに舐めとり、そのまま流れを辿った。耳の後ろにまで舌を伸ばされて、熱い息が耳たぶにかかる。

「甘い……」

尖りをより強くクニクニと擦られて、甘く切ない刺激に身体がビクンと反応した。敏感な先端に

熱い息がかかる。

（あ……）

恥じらった拍子によじれたシーツに指先が食い込んだ瞬間、甘い電流がピリリと背中まで駆け抜けた。

「ふあっ……ん……あ……んっ……」

強く吸い付かれるたびに、まるで胸に芯が通ったみたいに中心が疼く。

無意識のうちに背中が反って、わずかに開いた唇からは、か細い喘ぎ声が漏れた。

「可愛いな、もう俺の印がついてる」

カブリと軽く噛まれて、一層色づく尖りは周りまで唾液まみれだ。

彼はそのまま胸に顔を埋めると、ピンと立った蕾を吸い続ける。ちゅく、ちゅくと淫らに響く水音に花乃の喘ぎ声が重なった。永遠にも感じる快感が、胸から波状に広がっていく。

甘く切ない息苦しさに、彼の頭を抱え、震える指先を柔らかな髪に埋めた。するとその動きに合わせてるように、柔らかい舌で敏感な先端をさらに弾かれる。

「ふう……んっ……んんっ」

一際大きな快感が押し寄せてきた。身体が熱い——彼の頭をかき抱きながら身悶えする。目尻も中心も濡れてくるのに、彼を求める心はますます渴く。

この、どうしようもなくウズウズする身体を彼で満たしてほしい……

追い詰められた花乃は、夢中で硬い身体に足を絡めて腰を押し付けた。

「……堪らないな」

彼も腰をびったり押し付けてくる。

熱い塊に下腹部をグイグイと押されて、その熱さや硬さをモロに肌で感じた。彼はすでに何も身につけてはいない。けれど羞恥心以上に、その大きな手で最後の布切れを脱がされるのが待ち遠しい。

彼の悪戯な唇や熱い吐息、手で触られるどこもかしこも、すべてが気持ちいい……

ふと好奇心に促され視線をゆっくり下にずらすと、花乃の全身がカッと熱を帯びた。

「あん……」

足の間がずくずく大きく疼いて、思わず甘い吐息と共に艶のある声を漏らした。

「ん……いい声だ……」

彼は心から嬉しそうにフツと笑い、腰をゆっくり動かす。硬い彼自身をわざと花乃に擦り付けられると、その灼熱に触れてみたいという欲求が湧き上がる。

頬がみるみる紅潮するけれど、乙女の恥じらいもやはり好奇心には勝てなくて。花乃の中に入れてほしいとその存在を主張する屹立を、そっと手のひらで包み込む。

(すごい、熱くて硬い……)

滑りのよい先端部を、指先で撫でてみる。

濡れてくる感覚を楽しむように優しく触れていると、「そんなに煽るな」と抑えた熱い息が耳を掠めた。そして大きな手が足の間へと侵入してくる。

ひゃあ、そんなトコロを、と思ったものの、自分も彼の大事なトコロを撫で回しているのだ。

ものすごく恥ずかしいと訴える羞恥心を無視し、勇気を振り絞って彼の指を受け入れるために少しでも足を広げた。

身体はすでにヌルヌルに濡れそぼっている。

花乃はクチュ、クチュとはつきり聞こえてくる水音に、耳まで真っ赤になった。

優しく触れてくる指が蠢くたびに、甘い愉悦で身体が震える。温かい愛液がますます溢れ出る。

「ん、んんっ……あ……んんっ」

ウズウズする胸の頂を再び唇に含まれると感じすぎてしまっ、快感を逃がすように上半身をよじった。蜜口からはさらに愛蜜が溢れ、彼の指をぬらぬら濡らす。花乃の膨らんだ花芽をぬめった指先が何度かこすると、「十分濡れているな」と満足そうに彼が熱い息を吐いた。

(なんて、熱い目をしているの……)

敏感な花芽を弄られて身体を震わせる花乃の瞳をじっと捉える彼は、目を逸らすことさえ許さない。

そんな強い光を宿す瞳に魅了されると、膝の裏を抱え込まれた。

そのまま身体を開かれ、思い切り押し広げられる。

「抱くぞ……」

「あ……っ……」

待ちきれないといった様子で、滑らかな先端が確かめるように、グチチュと蜜口に侵入してきた。

ググッとくる強い圧迫感と、いよいよ彼に……という興奮を抑えきれず、背中に回した指先に自然と力が入る。

(大丈夫、だって大好きな一樹さんだもの……)

そう思った瞬間、力がフツと抜けた。睫毛を震わせ自然と目を閉じる。そして一気に身体を灼熱の硬直に貫かれた。

「つ……」

身体が灼けつくように熱い——！

鋭い痛み悲鳴を上げそうになるが、本能的にダメツとすべてを呑み込んだ。けれど、目尻からは抑えきれなかった一筋の涙がはらりとこぼれ落ちる。

「くっ、……こら、もう少しだけ緩めてくれ」

優しい手に頭を愛しむように抱えられ、指先で髪を撫でられた。

(よかった……涙はきつと、見られていない)

不意に、ポトツと素肌に滴り落ちてきた汗の雫で、彼にも余裕があまりないのだと花乃は本能的に悟った。

彼は低い声で、まるで宥めるように優しく名前を何度も囁いてくる。すると、痛みに堪え小刻みに震えていた身体から、ふうと力が抜けてきた。

「ああ、すごくいい……」

感じ入るように告げられると、とても嬉しい。彼が感じてくれている。

彼はすぐには動かさず、深く入ったまま、ぐぐつと体重をかけてくる。

だけど、なんてリアルな夢なんだろう……挿入られたままの焼けるような感触に、頭がぼうっとしてくる。

体内に居座る圧倒的な存在を意識させられ、そのせいでさらに感じてしまう。

だが花乃はすべてを受け止めた。

愛しい人に、今抱かれている——それだけで胸が一杯になり、嬉しくて泣きそうになる。

(一樹さん、一樹さん、大好き……)

心の中で繰り返す彼の名を呼んだ。

——痛かろうが、重かろうが、大好きな人に初めてを捧げて優しく抱かれる夢……

たとえ妄想だらけの夢の中でも、愛する人に情熱的に抱かれている。

こんなこと、現実では決して叶うわけがない。

だからこそ、本物のような破瓜の鋭い痛みにさえ感動を覚える。

(なんて素敵なんだろう……)

やがて彼が、ゆっくり腰を動かしてきた。

溢れそうな涙を閉じ込めていた目を、そうと開くと、そこには情熱を湛えた瞳が揺らめいている。

彼が自分を抱いて興奮している。そればかりか、愛おしそうにこちらを見つめ返してくれる。

心から満足していることがうかがえて、花乃も満ち足りた笑みが自然と浮かんだ。

言葉の代わりに彼を見つめる目に愛おしさを込め、汗ばんだこめかみに手を伸ばす。そして温も
りある頬に触れつつ、濡れた瞳でふんわり笑いかけた。

すると彼の顔が急にアップになって、突如顔中に優しいキスの雨が降ってきた。
額ぬかに頬、目元にまぶた、そして鼻の頭までチュッと濡らされ、おまけとばかりに柔らかい舌でな
ぞって舐め上げられる。

最後に彼の唇がやんわり重なると、砕けんばかりにギューウと強く抱き締められた。

そして、一気に奥まで突き入れられる。

「あっ……は……っ……」

慣れない身体に、鋭い痛みが再び走った。

すぐ抑えきれないといわんばかりの律動が始まる。勢いも激しく、深く浅く穿うがつてくる。

ズキズキと痛む秘所をかばう暇もなく、腰が砕けそうなほど延々と揺らされ続け、目の焦点が定
まらない。

だけどそれは決して、乱暴ではなかった。

まるで長い間離れていた恋人に、もう一度自分を刻み込む……そんな情熱に包まれる。

甘美な攻めに、心も身体も囚われた花乃は細かく震えた。

波のようなリズムで腰を打ち付けられるたびに、身体の奥が痺しびれ痙攣けいれんが走る。

「あっ……あ……ああ……っ」

「くっ、良すぎる、持っついていかれそうだ……」

そうされるうちに、痛みはだんだん何か違うものにすり替わり、腰の奥がムズムズと疼うずいてきた。

花乃の腰が勝手に彼の動きに合わせ、わずかに揺れている。

やがてはその、引いては寄せるリズムに合わせ、大胆にも足を持ち上げ、腰を浮かせて彼を迎え
入れた。

ズン、ズンと重量感のある突き上げが、繰り返し奥に届く。そのたびに、わずかな痛みと共に、
目眩めまいがするほどの快感が身体を走り抜けた。

（痛いのに、嘘みたいに気持ちいい……）

身体は痺しびれるように震えつばなしで、痛い気持ちいいが甘く混濁こんだくしてくる。

二人の繋がつながったところからは、グチュ、グチュと恥ちずかしい音が絶え間なく生み出され、さら
に大きくなる。力強く突き上げられるたびに花乃の全身から溢あふれる、“大好き”がこぼれ落ちるよ
うだった。腰を掴つかまれ雄々しい攻めを受ける中、彼が激しい呼吸の合間に自分の名を呼ぶのが聞こ
える。

「花乃、花乃……」

まるで愛している、と告白されているみたいだ。

熱く荒い息が髪にかかると、ますます心が蕩とろけ、快感に追いつてられていく。極みはもうそこま
できていた。

（あ、ダメ、もう、だめ、こんっ……一樹さん——っ！）

心の中で彼の名を呼び、すべてを委ゆたね手放した瞬間だった。

身体中が感電したように、背中も腰も大きく震え極まりを迎える。

「あああつ……」

無我夢中で腰をよじった。

そうしながら快感に耐え、シーツをギュウウと握り締めると、背中が反り返り、中がきゅううんとうねるように締まった。

花乃の甘美な締め付けに、彼は腰を強く押し付け、味わうように硬い屹立を奥深くまでグリグリと埋め込んでくる。

「これで、もう……」

(あつ、ん……つ)

奥に、温かい飛沫がドクドクと流れ込んでくる。

花乃の膣内が熱いほとぼしりで激しく濡らされていった。

彼の情熱で潤う初めての感覚に、また極まってしまう震えが止まらない。

(ああ、もう幸せ……、夢とはいえ、一樹さんに丸ごと愛される、なんて……)

心からの喜びで、毗から幸せの涙が一粒こぼれ落ちた。

押し寄せる快感と感動で、心が充実感で満たされていく。

今の今まで、知らなかった。

好きな人に抱かれることが、どういうことなのかを。

まるで自分の魂の片割れを得たような、この至福の喜び……

興奮した意識の中、花乃の身体がフワリと浮いた気がした。

注がれた熱い精が、足の間からどろりと溢れている。生温かく、ぐっしり濡れた感覚がしたが、花乃は目を閉じてグツタリとシーツの上に横たわった。

固く抱き締められたままの身体は、弛緩と気だるい感じに襲われ、今は指一本も動かせない。

薄れゆく意識に身を任せ、最後にそっと「好きよ……」と呟く。

そのまま魔法にかかったように、スーツと寝息を立てた花乃はぐっすり眠りについた。

シーツを引っ張られた——そんな感触になんとなく寝返りを打った後、妙な胸騒ぎがして、ぱちつと目を開けた。

すると視界に飛び込んできたのは、見覚えのある超イケメンの寝顔。

夢の続きかと一瞬、神様に感謝しかけた花乃は、腰にかかる大きな手の熱さにハッとした。

身体に巻きついていている逞しい腕の感触——どうやらこれは現実らしい。

まだ夜明け前なのか部屋は暗かったが、隣で穏やかに寝ている男性が幻ではないことぐらいはさすがに分かる。

痛む身体に顔をしかめて、そうっとシーツを持ち上げれば、自分は真っ裸だ。ついでに、隣の彼も当然裸だった。

うわぁっと叫びそうになる声を、花乃は全力で呑み込んだ。

(ど、どうなってるのこれ……?)

ハテナマークが脳内で飛び交う。

なぜ昨夜バーで見かけた、あの人そっくりのイケメンと同じベッドで寝ていて、その上二人とも全裸状態なのか。

足の間は何かヌルヌルするし、その周りは何度もこすったように染みて痛い。内もものはものすごく乾いた感じがする。

それに身体を動かそうにも、腰にうまく力が入らない……

そっと周りを見れば、乱れまくったシーツに、絨毯じゅうたんに脱ぎ捨てられたバスローブが目に入る。

これは、どう見ても事後——つまり朝チュン状態である。

(あああ！ どうしよう、絶対やらかしてしまった！)

「ご丁寧にも、昨夜の記憶が断片的に蘇よみがえり、走馬灯のように浮かんで消えていく。

花乃の全身からサーツと血が引いた。

まずい、まずい、まずいっ！

夢だと信じ込んでいたとはいえ、知らない男性とこんなことになるなんて……

(ああ、でも、こんなにも好みの人に抱いてもらえた……)

花乃の人生における最大の非常事態なのに、現実逃避もいいところで、彼の寝顔を見つめると一瞬で喜びが溢あふれる。

これはダメだ……と焦る気持ちと、こんなに素敵な人と初めてを……という能天気さが程よくミックスされ、頭は即パニックになった。

だけど、とりあえずはベッドから退却。状況を把握しよう。

ぎこちない身体にムチ打って、温かい腕からそろそろと抜け出す。

腕はなんとか動くのだが、下半身と腰がガクガクして、情けないことに最後はほく前進である。時間はかかったが、なんとかソファアのある部屋まで退却できた。

(と、とりあえず、水を……)

ボトルに手を伸ばし、一口水を飲んで落ち着くと、ふとソファテーブルに置かれている名刺が目飛び込んできた。

『花鳥コーポレーション アジア統括シンガポール支社長 天宮一樹』

本店と呼ばれる親会社の名前にも驚いたが、この名は確か最近目にしたばかりだ。

(あつ、今期うちに来る新社長！)

主任に頼まれて作ったIDの主ぬしと、同じ名前ではないか……？

そういえば、昨日のバーでも確かに彼は、『天宮さん』と呼ばれていた。

……ということは……

先ほど花乃を襲ったパニックは、今感じているこの大パニックに比べればカワイイものだろう。フラリと倒れてしまいそうなほどのショックが、花乃の身体を走り抜けていった。

(私ってば、自分の会社の社長と……!?)

しかもだ。昨夜、彼は紳士的な態度でこのソファアで寝ていた。

それを真夜中にわざわざ起こし、しかもキスをして間違いない自分から誘惑を仕掛けた。

彼もバーで飲んでいたし、二人とも酔っていたとはいえ、彼には昨夜見かけた綺麗な女性もいるというのに、なんとということ……！

これはもう、やっちゃったぜ、てへ程度の誤魔化しで済まされる問題ではない。
(……逃げようっ)

今すぐ遁走だ。彼が目覚まさないうちに、ここから逃げ出さなければ。

自分さえここにいなければ、彼も酔っていたから夢だったと思うかもしれない。

花乃は血走った目で、服はどこ、と周りを見渡し、すぐに昨日シャワーを浴びたことを思い出した。

絨毯の上を四つん這いでバスルームへ這っていき、きちんと畳である服を、身体の痛みに顔をしかめながらも大急ぎで身につける。

(どうしてショーツがないのっ？ ブラはここにあるのに！)

けれどどんなに周りを見渡しても、ブラとお揃いで買ったお気に入りのショーツは見つからなかった。

幸いスーツは仕事柄動きやすいパンツスーツだったので、思い切ってショーツは諦める。

なにせ彼が目覚ましてしまったら、即アウトだ。

押し迫った事態に、そのままスーツを速攻で身につけた。

よし、とパンツと一緒にソファアの横に置いてあったバッグを掴む。

後は全力でここから逃げ去るのみ。

転げるように廊下に飛び出した花乃だったが、幸い夜明け前なので周りには人影がない。

エレベーターに乗ってボタンを押すと、ホワンとした浮遊感がまだ辛い身体を襲ってきた。

だが、耐えなければ……このホテルを出るまでは、安心できない。

手に持ったパンツ履きフロントに着いた花乃は、女優も真つ青の演技で堂々とコンシエルジュにタクシーを呼んでもらった。

実際はノーマイクのひどい顔なのだろうが、今はそんなことに構ってられない。

花乃はすぐに来たタクシーに乗り込み、急いで自宅の住所を告げた。

タクシーの後部座席にぐったりともたれ、落ち着かない胸を押さえながら窓の外をぼんやり眺める。

どこまでも続く街路樹の緑が視界に入ると、花乃の脳裏に、子供の頃にこの近くの公園によく足を運んでいた懐かしい記憶が蘇った。

2 初恋の人

初恋の人、遠藤一樹に初めて出会ったのは、花乃が十一歳の時。場所は都内の図書館だ。

当時小学六年生だった花乃は、本棚に沿って本を物色していた。その時、一人の少年が視界に入った。